
しん馬恋き
僕と交尾しよ
だって
のって
気持ちが
いいものね
本文58項


ああ
なんて綺麗な生き物
神様って本当に君のような姿をしているんだと思う
神様
神様……
僕は僅かな慰めさえ……

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

うちには「座敷童」が居る。

通称「てんしさま」

てんしさまは
蛇の姿を
しているらしい

てんしさまは
壺の中に住んでいる

壺の管理は長子の
役目

壺を大事にしていれば
家が栄えると言われている

壺は人目につかない
暗い場所―
蔵の床下に納められている

壺には週に一度卵を供える

？

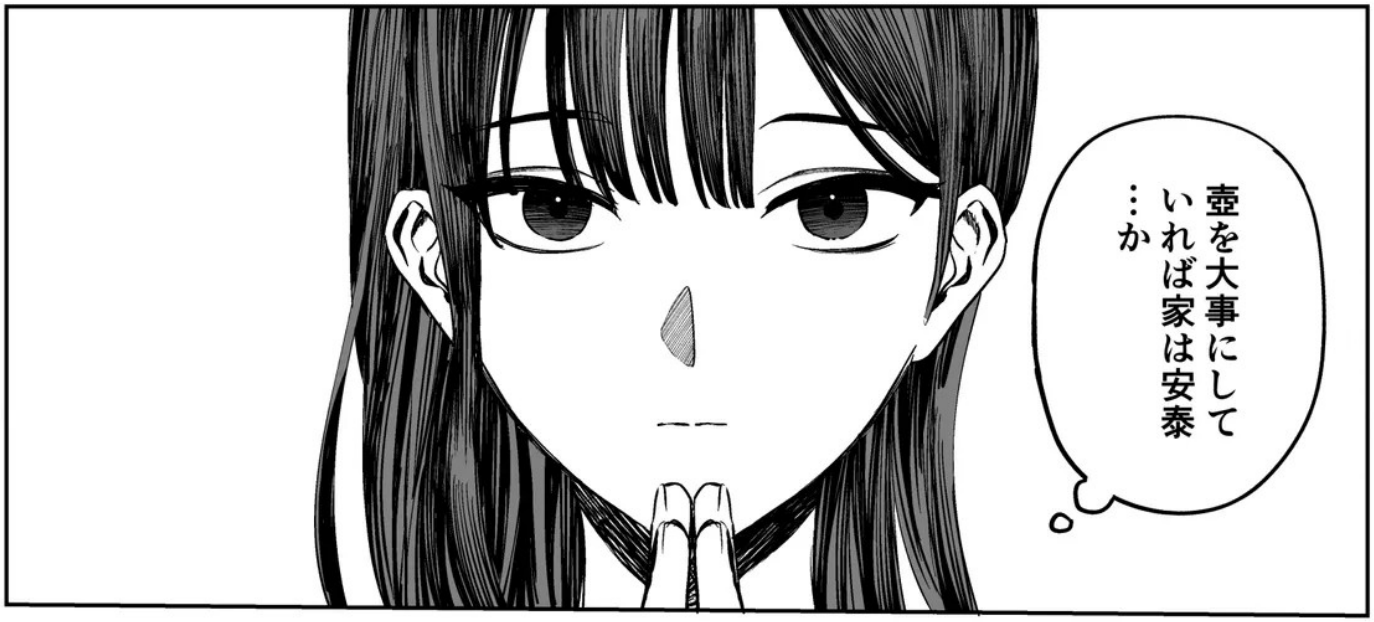
卵を上から落としても
落下の音はしない

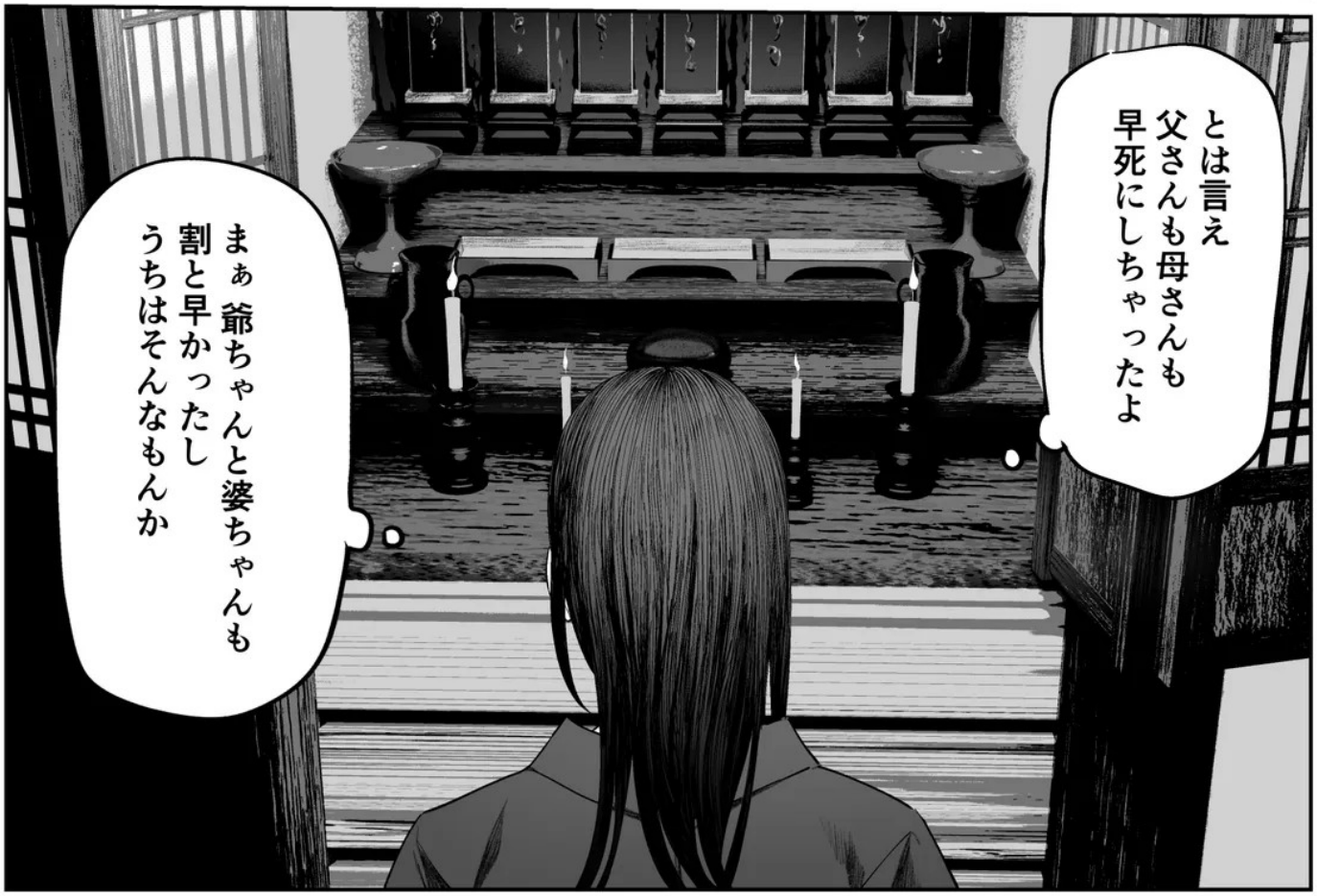
それは幼い私の興味を
惹くには充分で

「見てはいけない」と
言われていた壺の中を

一度だけ
覗いたことがある

真っ暗闇の中で　何かと目が合った

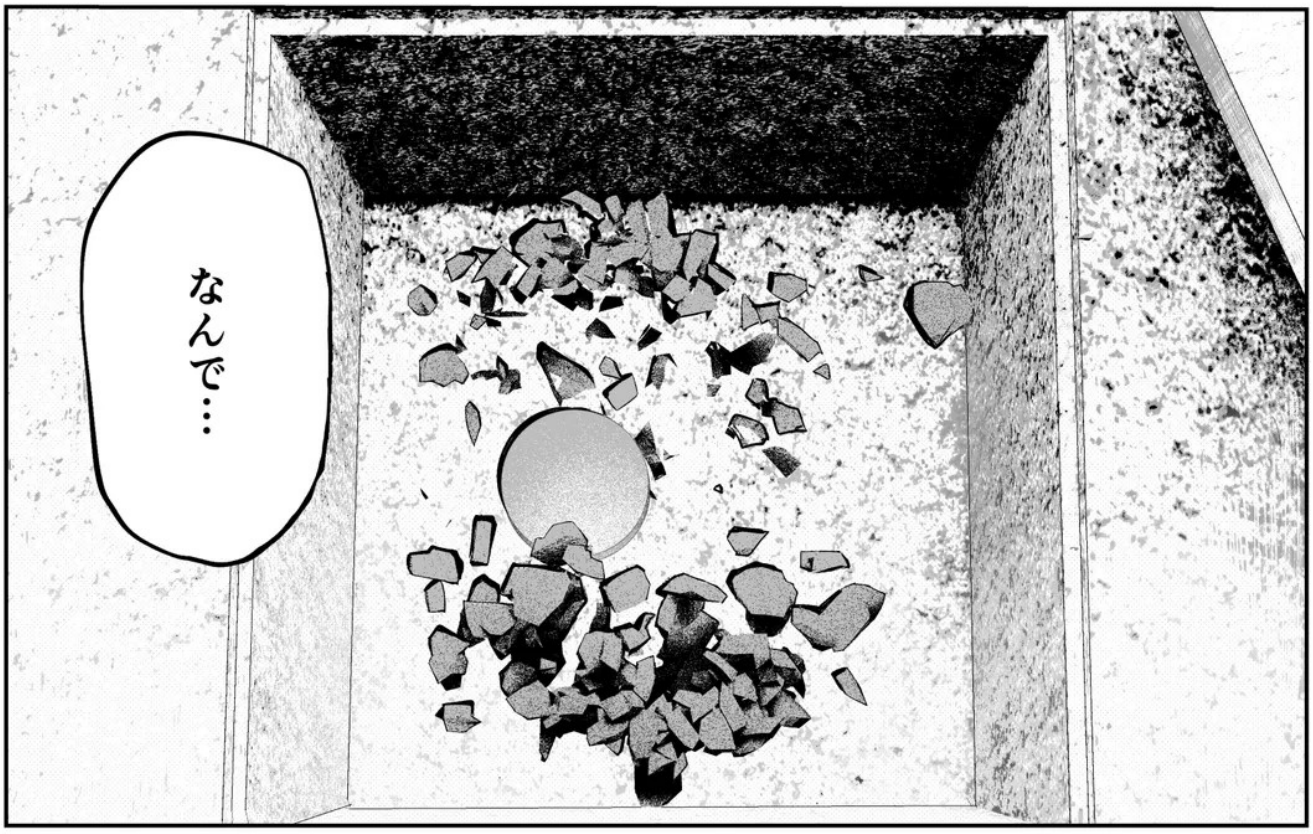

壺を大事にしていれば家は安泰…か


とは言え父さんも母さんも早死にしちゃったよ
まぁ爺ちゃんと婆ちゃんも割と早かったしうちはそんなもんか

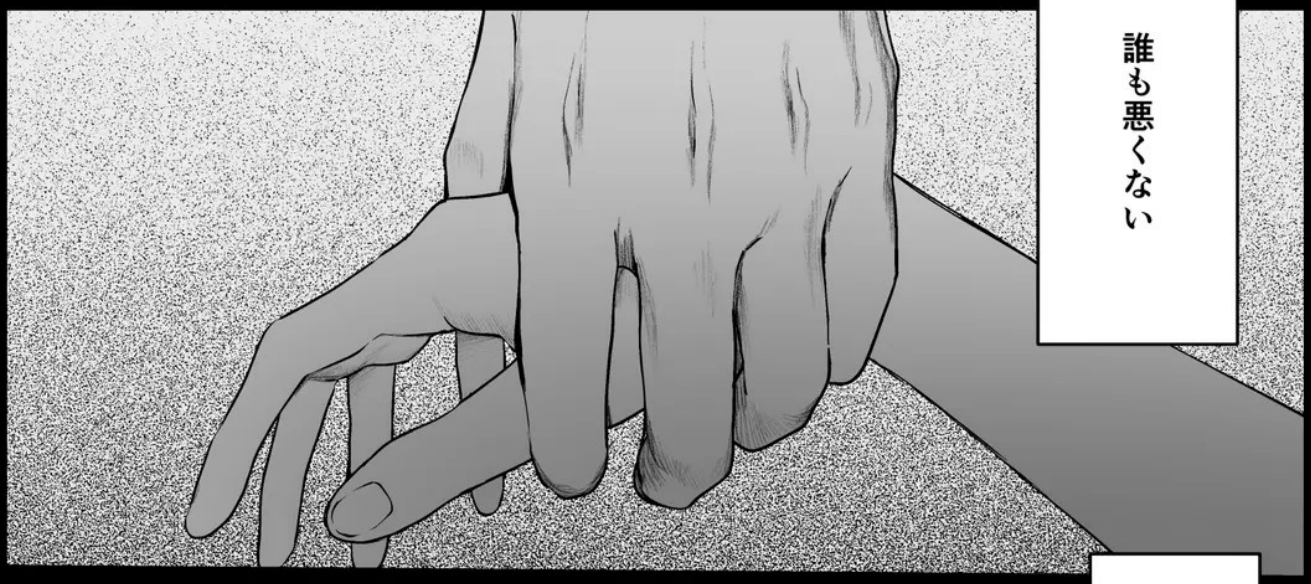

妹は早くに結婚して家を出て行った
そして少し前に子を成したばかりだ
血を絶やさないという意味でもご利益はあるのかもしれない


葬式やらなんやらで
忙しなかったけど
やっと落ち着ける
残されたのは
一人で住むには広すぎる
この家と…
今となっては
意味があるのか
わからないけど


えっ


なんで…

誰も悪くない



仕方がなかった



ただ　そういう巡り合わせだっただけ





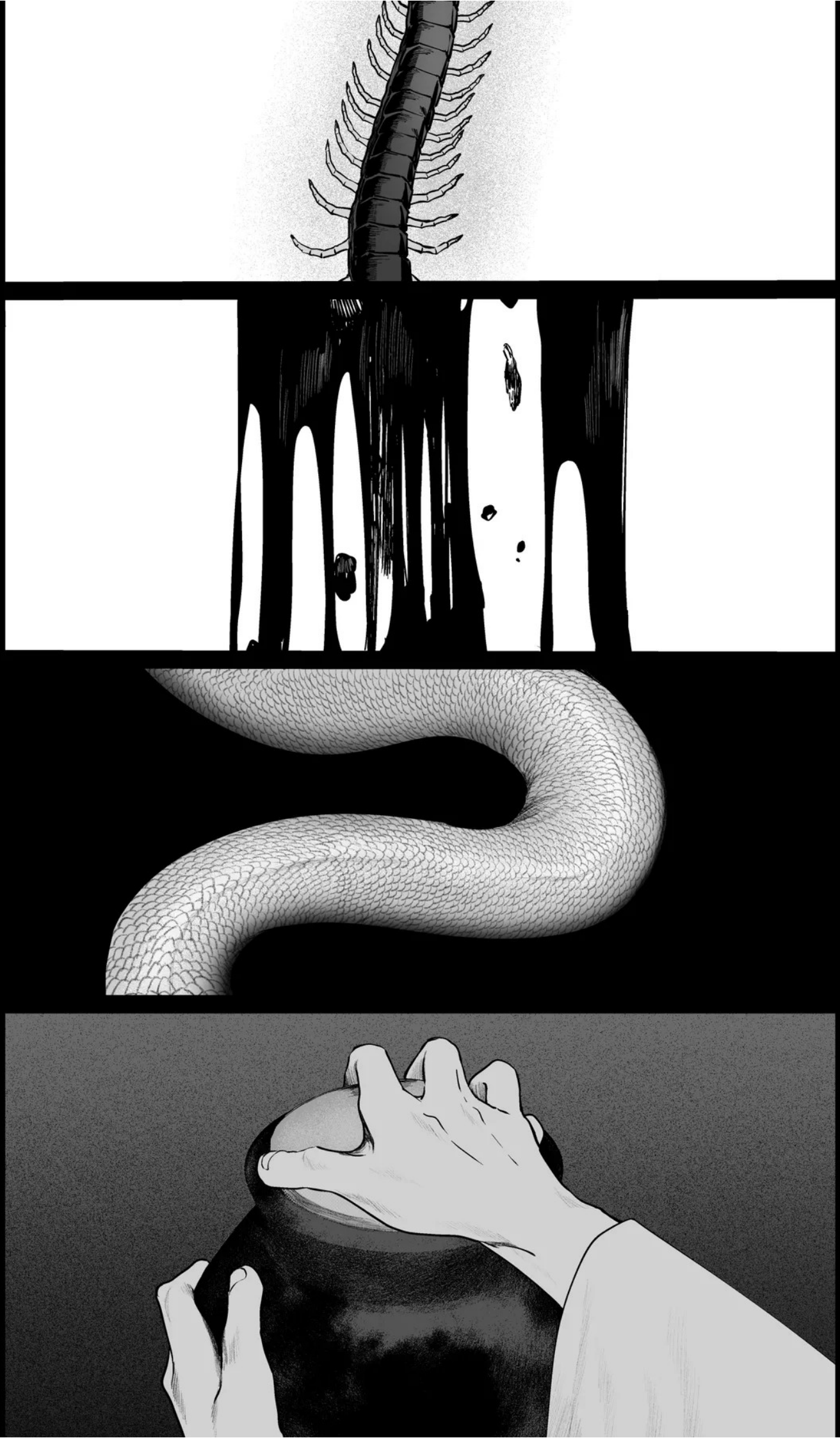
誰のことも恨んでいない






知らない誰かの一生


祀り上げられて
利用されて
人としての尊厳など
何も残らなかった
それでも誰のことも
恨んでいない
そんな誰かだった……
人生を視た




…何か
気分の悪い
夢を見たような
あ
お姉さん
気がついた？


大丈夫？
まだぼんやりするかな
…誰？
どこ？


…
いや…
ここ
蔵の奥の…
痛いところ ない？
苦しくない？
？
…ない
と思う…
この子は…
お姉さん


僕と交尾しよ


……
交尾…？
僕のこと きらい？
……？
……
わからない
お姉さんは
何もしなくて
大丈夫だよ
僕 がんばるから
ね？
なるほど


まだ夢を
見ているのか
思考が
定まらない
突拍子もない状況
どうりで 何もかも
現実感がない


ちゅ〜…
あっ
あ…
ビク
ぬちゃ
ぬちゃ

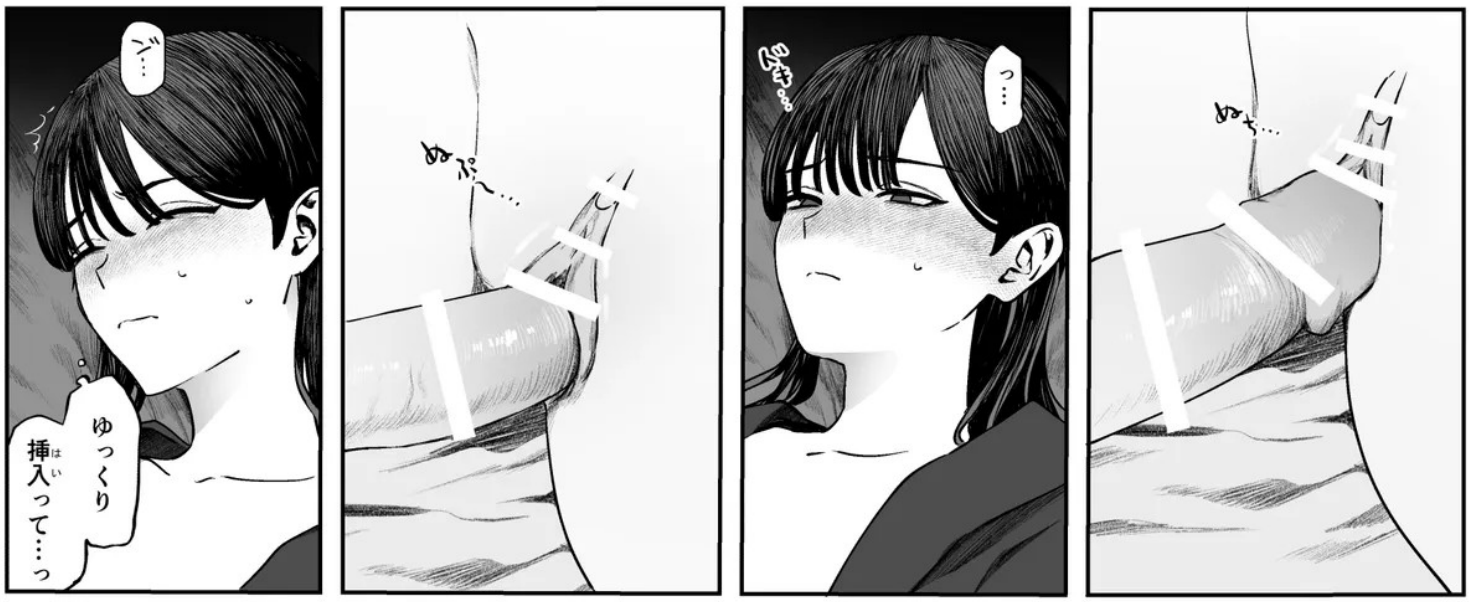

はぁ
はっ
はぁ
ちゅ…
はぁ
ちゅく…
ふっ
んっ
ぢゅ
うぁ…?!
ぢゅ〜…
ぐっ
はぁ
ぐぅっ…
こっちも
硬くなった


はぁ
くちゅ
くちゅ
あっ
あっ
そこッ
ばっかり…ッ
ぐり
ぐり
やっ
あ
くちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
くちゅ
おっ
あっ
なか
きゅうって
なってる…
ふー…
ふっ…

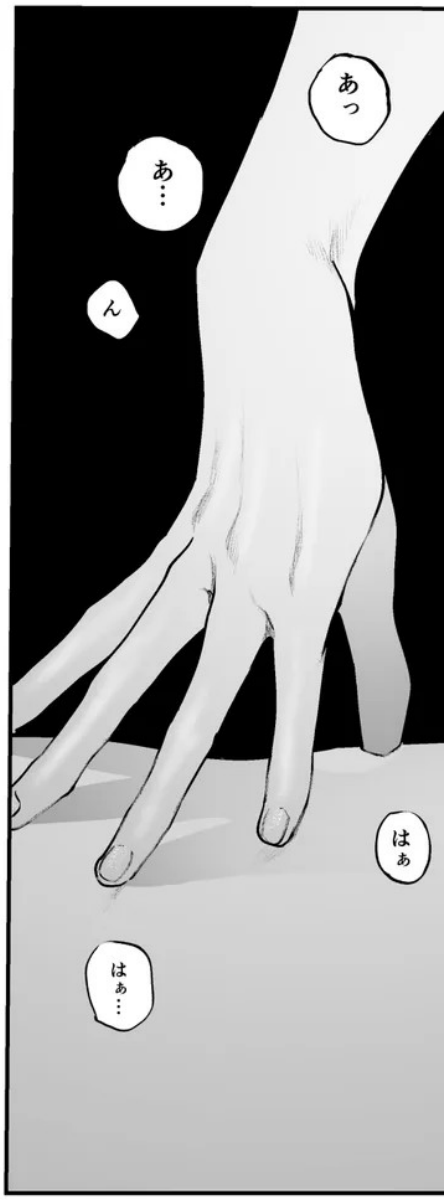

声抑えなくていいのに
僕ら二人しかいないんだし
ここ
そんなにきもちいいんだ
っ…
ぴく
…もっとしてあげるね
うあ
ビクッ
ぬろ〜
はぁ
はぁ…


ぐりっ
……ッ
ビクッ
んっ…
ちゅく
ちゅく
あっ
はぁっ
はぁっ
ぐっ
ん…
ふっ
ふっ
ふー
ふー…
ぐっ
んっ…
ざらざらの舌が…
にゅぷ
にゅぷ
ちゅ
ちゅく
ぢゅー


ちゅ
じゅぷ
ぢゅ
ちゅぷ
にゅぷ
ぬぷ
ぬぷ
もう大丈夫
そうかな
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ちゅぽ…
んぁ
あ…


ぬち…
っ…
ぬぷ…
ゾ…
ゆっくり
挿入(はい)って…っ


ふふ
全部
入っちゃった
生き物の
内臓って
あったかくて
気持ちいいね


あっ
あ…
ん
はぁ
はぁ…


ぬる…
はぁ
は…
はっ
はぁ
はぁ
ぱんっ
あっ…?!
あ
ぱちゅ
あっ
はっ…
ぱちゅっ
あっ
あぁっ


ぱちゅっ
ぱちゅ
ぱちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ


あっ
あっ～～…
ビュ～…
ズル…
う
あ
膣内に…
はっ
はぁっ
はぁ
出て…
はぁ…
…疲れた…
全部混ざっていく…

大学？

必用ないだろう
お前は家に居なさい

仕事だって
しなくて
いいんだ

外に出なくとも
事足りるさ

家を守り子供さえ
作ってくれれば
それでいいんだよ

大丈夫よ
ただ家を継げば
いいだけなのよ

何もしなくて
いいのだから随分と
楽な人生でしょう？

あなたの夫は
しかるべき
タイミングで
見繕ってあげるから

……



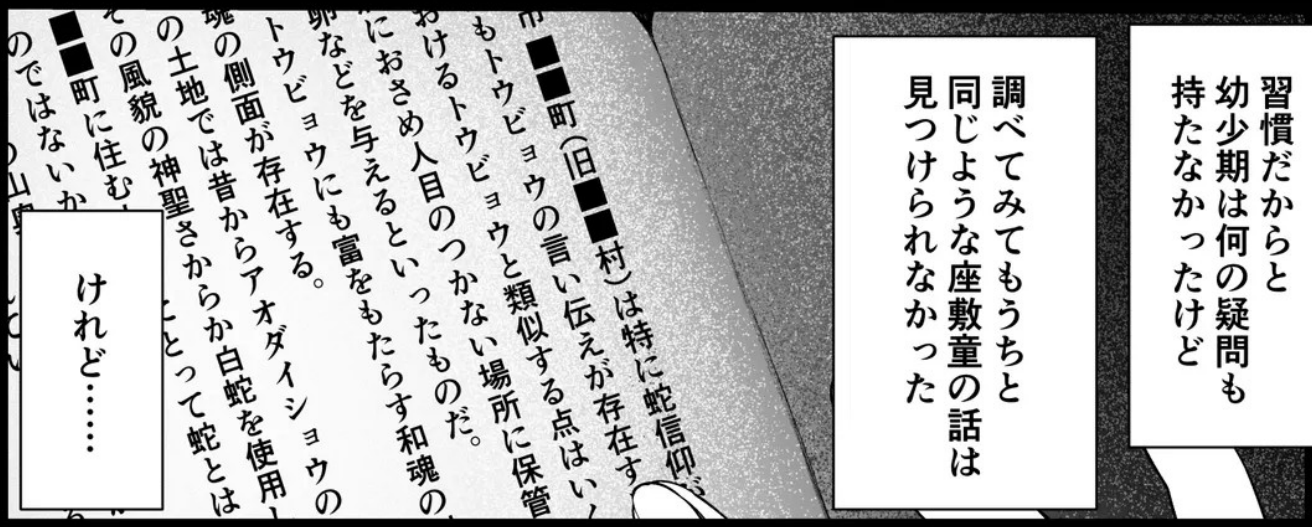
ここは
静かでいい

誰も近寄ら
ないから



習慣だからと
幼少期は何の疑問も
持たなかったけど

調べてみてもうちと
同じような座敷童の話は
見つけられなかった



卵を供えるという
ところからして
「人」より「蛇」の側面の方が
大きいように思う

「座敷童」の話は
どこからきたのだろう

どこかで間違って
伝わったのか
あるいは意図的に
隠したのか…

壺もそんなに年季が入っているようには見えないし歴史は浅いのかも

少なくともうちの両親はアレの出自を把握していない

両親が私に家を継がせて子供を産ませようとするのも今までずっと「そうやってきたから」ってだけだ

あの人たちにとって「変わらない」ことは何よりも大事なことなのだ

金銭面で不自由ない生活をさせてもらっていることには感謝してる

恵まれている自覚はある

しかし私とは絶望的に相性が悪い

…私が何もかも捨てて出ていったら

妹はどうなるんだろ

妹には自由に生きてほしい

妹が自立して家を出て行ってからなら…

僕のこと嫌い？

壺の管理は別に今更…
好きとか嫌いとかない

…私はこの土地も家も
嫌いなわけじゃない

できることなら
この家でずっと
暮らしたい

だけど両親が
いる限りは無理

あの人たち（両親）…

いなくなれば
いいのに



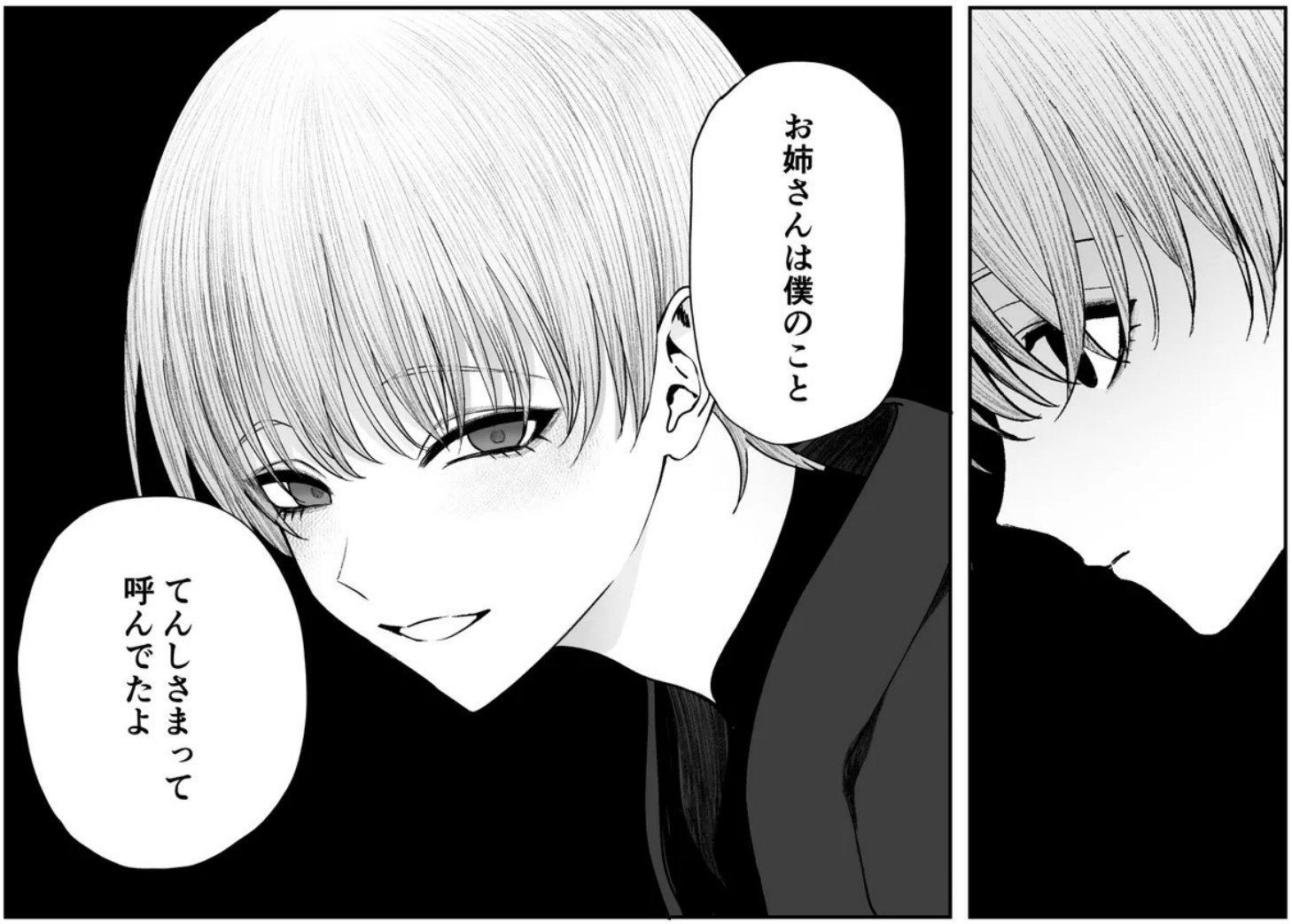
……

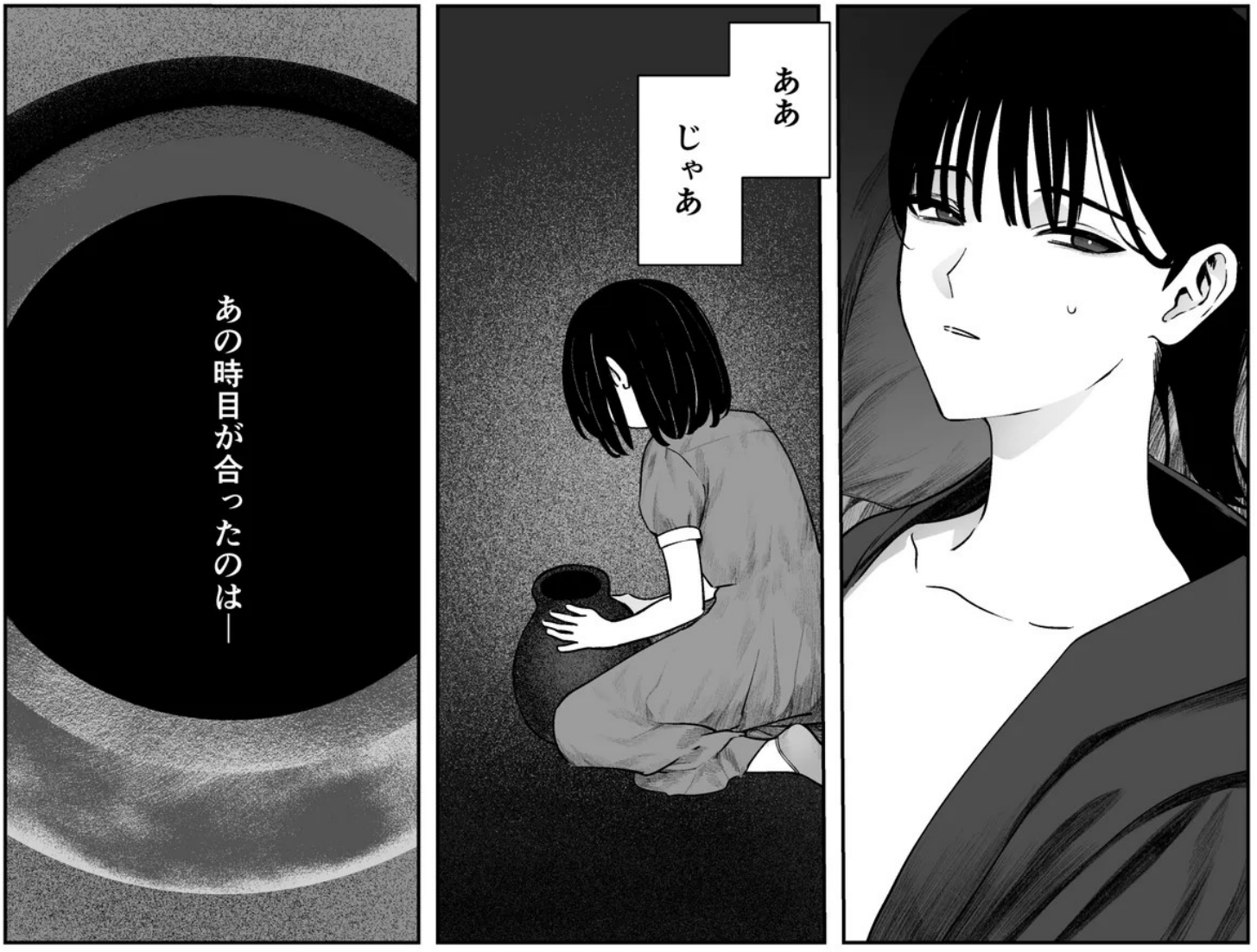
だれ？

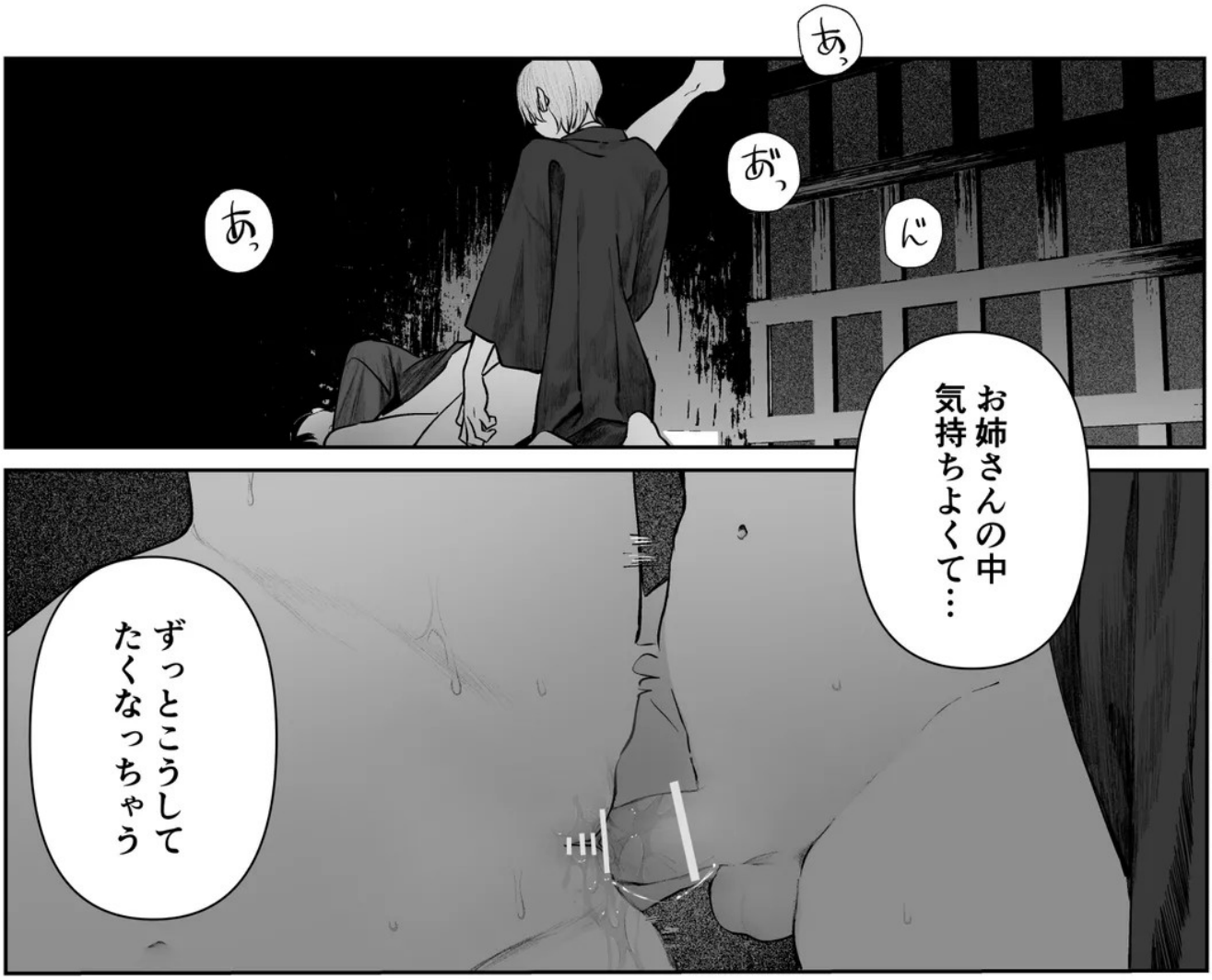



……
え…
あれ……
気分はどう？
さっきよりは
よくなってると
思うんだけど
ズル…
っ…
？
？
なんで？
これも夢？
意識も
感覚も
こんなに
はっきりして…
……知らない男と
セックスしてる……


ごめんね
痛かったよね
お姉さんは
ずっと近くにいた
から大丈夫だと
思ってた
でもお姉さんの中
僕のでいっぱいに
なったら
もう大丈夫
だから
最初から
こうしてれば
よかった
あなたは…
だれ？


お姉さんは僕のこと
てんしさまって
呼んでたよ


ああ
じゃあ
あの時目が合ったのは―


あっ
あっ
あっ
ん
お姉さんの中
気持ちよくて…
ずっとこうして
たくなっちゃう


お姉さんも
はじめてなのに
ちゃんと気持ち
よさそうでよかった
はじ…
…なんで
そんなこと…
ずっと
見てたから

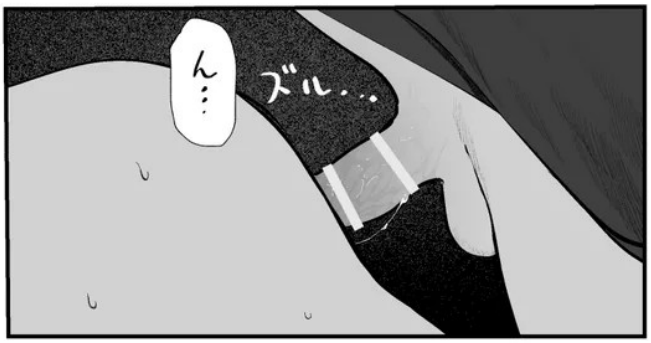

ちゅぽ
あぅ
お姉さんのこと
なんでも
知ってるよ
あ…
また
挿入って…
っ…
後ろからゆっくり
引き抜かれるのっ
だめ…っ
んっ…
こうやって直に
繋がってからは
なかのことも
よくわかる


はぁ…
はぁ
はぁ
ぢゅっ
ちゅく
ちゅく
おっ…?!
おっ
あっ
まって
待って…っ
そこっ
だめっ
かわいい…


はぁっ
はぁ
はぁ
あっ
あっ
あっ
ちゅぷ
ちゅこ
ちゅこ


めちゃくちゃに
掻きまわされて
すごい音してる…
おっ
あっ
はぁ
んっ
ん
…♡
ちゅく
じゅく
ちゅく
いっちゃう
あっ
あっ
あっ
あっ……♡
ビクッ
とし…
とぷ…


また…
深いとこっ…


ん…
ズル…


ぎゅ～…
うぁ
あっ…?!


奥にっ…
擦り込まれて…
あっ…
私の体
この人のモノにされてる…
あ…


うぁ…
ん…


はぁ
はぁ…
はぁ
はぁ…
はぁ…♡
はぁ…♡
はぁー…♡


お姉さんの
妹は家を
出ていって


お姉さんのお父さんと
お母さんはもういない


僕
うまくやれたでしょ？


お姉さんの
嫌いなものは
もういないんだから
出て行ったり
しないよね？


僕は行く
場所もないし
お姉さんが
いてくれたら
それでいいから
お姉さんの
きらいなもの
僕が全部
殺してあげるから
だから
置いていかないで
おねがい
私
あの時
中を覗いて…
どうしたんだっけ……


…そう
そうだね
けど
何も
しなくていい
ここにいて
くれるだけでいい
私も…どこにも
いかないから


……
うん…
うん
うれしい…



ちゃんと
ここに留めて
おかないと

私が生きている
間だけでも

外に出たい？




あの瞬間
あなたが僕を「視」て
僕は自分の「形」を思い出した


小さくされて
喰べられて
どれが僕か
わからなくなった
ずっと昔に失くした
僕の「形」


誰のことも恨んでない
仕方がないよね


だって
奪うのって
気持ちがいいものね


ん…？
あれ
何…？


げほっ
痛っ
はぁ
げほっ
内蔵が
痛いっ
あ
痛い
全身が…
?
はぁ
?
はぁ
?…
……


そうか
僕をわけてあげる


まだ
死なないで


僕のために生きて

小学2年生から3年生
までの1年間だけ祖父の
家で生活していたことがある



その時に仲良くして
くれていたのが
巴ちゃんという子だ

巴ちゃんは所謂
地主の娘だった
家に遊びに行った時に
私ははじめて
「屋敷」というものを
意識したよ

妙に気の合う子で
話をしていてもどかしく
なるということがなかった

そんな巴ちゃんともひとつだけ
噛み合わない話題があった

当時の私の中の「てんし」というと
頭の上に光輪が浮いていて
羽根が描かれてたりもする
エンジェルの方だったんだが



巴ちゃんにとっては
そうじゃなかったみたいだ

「てんし」は壺の中に住む
蛇だという

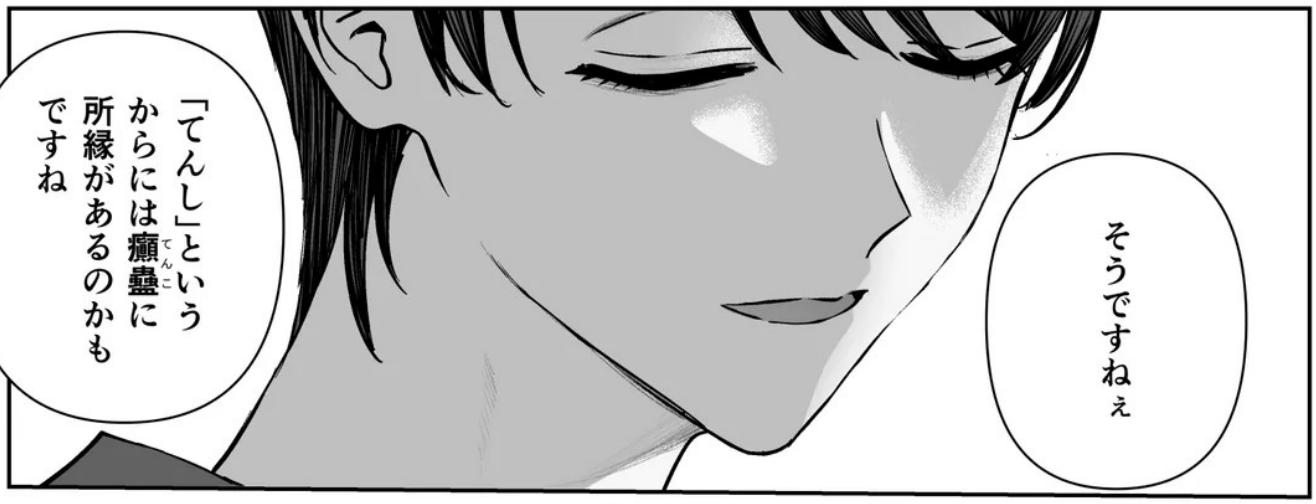
彼女の家では
そう教えられていた
みたいなんだが
話を聞いているとどうも
「天使」と「てんし」は
そもそも別物のようだ



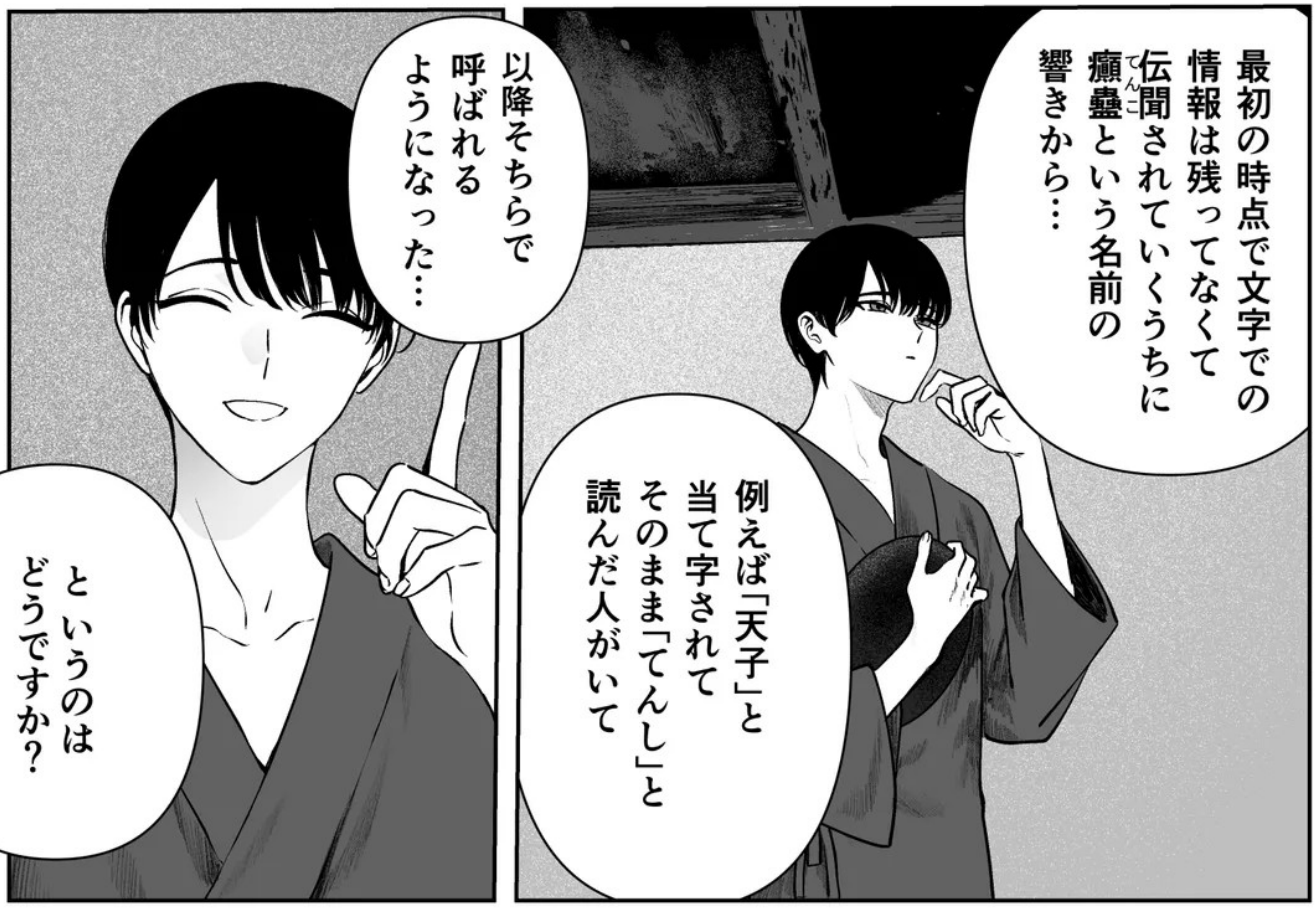
巴ちゃんは
「そっか」
「普通はそうなんだ」
と一人で納得していた

「てんしさまは礼を欠くと祟る」
のだそうだ




そうですねぇ
「てんし」という
からには癲蟲(てんこ)に
所縁があるのかも
ですね


ああ…
蠱毒の中には
そういうのも
あったか
どういう
成り行きで？
それは
わかりませんが


最初の時点で文字での
情報は残ってなくて
伝聞されていくうちに
癲蟲(てんこ)という名前の
響きから…
例えば「天子」と
当て字されて
そのまま「てんし」と
読んだ人がいて
以降そちらで
呼ばれる
ようになった…
というのは
どうですか？


……
キミのとこの
旅館は相変わらず
暇そうでいいね
物を書く時間も
潤沢にありそうだ
もう
あなたが
呼び止めたのに
余暇がある
のもうちの
良いとこです
ごゆっくり
お
降って
きた
彼女は今も
あの家に
いるんだろうか
…いや
自立心の
高い子だったし
今はもう
家を離れているか

去年うちにある燕の巣に蛇が来たんです。
うちの母親が追い払ってくれと騒ぐので柄の長い箒の先でつつくと蛇は向きを変え
箒の先にゆるく巻き付きました。それだけで蛇の持つ力強さが伝わってきました。

小学生の頃、捕まえた蛇を首に巻いてみたことがあるんです。
細くてまだ小さい蛇だったんですが、ゆるく絞められただけで死がすぐそこにある感触がしたんです。
蛇って見た目の想像以上に力が強いんですよね。

蛇は何度か体をくねらせ壁から降りるとゆっくりとその日は去っていきました。
数日後にまたやってきて雛は結局食べられてしまいました。

そこそこの大きさのアオダイショウで、うちの天井に住み着いていた個体だと思います。
雛が蛇に食べられたのはこれがはじめてではありませんし、珍しいことでもありません。
これが自然の在り方であり、人が干渉することではないと思っています。
そういう意味では、うちの母親はこの辺りでは珍しい部類の人だと思います。

そもそもうちの地域は蛇が多いのです。
昔は山奥に蛇を祀る神社があったほどなので、ここの人たちは蛇をそれなりに大事にしています。
トウビョウってあるじゃないですか。中四国に伝わる蛇の憑き物です。
場所によっては狐でしたっけ？うちにも似たような信仰があったみたいです。
その神社はもうないんですけど、結構立派な神社だったみたいで。
ただ、廃れた原因ってことで伝わってる話が全部荒唐無稽というか、ちょっとオカルト
すぎるんじゃないかなって。

神主が親の居ない子供を引き取って何かの儀式に使っていたとか
神様として崇めていた蛇を使って作った蟲毒の呪いでみんな死んじゃったとか

こんな話、どんな本にも載ってないと思いますよ。誰も信じていませんし、いつのことかも
わからないし、うちって本当に田舎で、閉鎖的なので。
蛇を見る度この話を思い出しては、なんとなく考えるんです。
もし本当にそんなものが作られていたなら、それは今はどこにあるんだろう。と。

一月十三日　もう壊そうという物件の床下から大層厳重に封のされた壺が出て来た
そういうものに詳しい知人曰く これはトウビョウだという
憑き物ではあるが大事に扱っていると富を得られ 粗末に扱うと
祟られるという代物らしい そのまま処分するのも忍びないので
家に持ち帰った 言われた通り卵を供えた

二月二十日　最近同じ悪夢を見る 目を覚ますと内容は殆ど覚えていないにも係わらず
同じ夢だとわかる ひどく疲れている 気が滅入る

二月二八日　あれはトウビョウではないと思う トウビョウは蛇の憑き物だと聞いた
あれがトウビョウであると言うならば 人の気配はなんなのか

四月六日　呪い師に見てもらった 子供の供養が必要だと言う どこの子供だろうか
あの壺を置いてから富は得られたが恨まれることも多くなった
神様として祀り 供養するための蔵を作ることにした

十月二十三日　蔵が完成した 表向きには座敷童のための蔵と言ってある
これが慰めとなってくれればよいのだが

十一月十五日　子供 子供なのだろうか あれは わからない

十二月四日　家族になど話すのではなかった

一月二十八日　心配だ うちの人間は誰も彼も物を大事にしないから
何を壊そうと 全て金で解決できると思っている
質素倹約に生きていた頃の心などとうに持ち合わせていない
金の亡者ども 呪われてしまえばいい

三月一日　もう手放せない もう遅い

・身長：167㎝前後
・25歳

てんしさまを「よいもの」と考えていたが
今は正しくその性質を理解している。
楽な恰好を好む。

妹には「てんしさま」が見えていたことを
巴は知らない



・身長：170㎝前後

巴に「意志のある存在」として認識されて
嬉しかった。
どうして嬉しかったのかはわからないし、
そんなのは些末なことにすぎない。

主は血で選ぶわけではない





■てんしさま
蟲と白蛇と人の肉体で作られた呪い。

親は亡くなっており、特異な見た目から村人たちからは疎まれていた。
引き取ってくれた神社で数年は穏やかに暮らしていたが
巳年のある日、殺害された。

人間だった頃の名前は「さら」(沙羅双樹の花から)
神さまに気に入られ、より呪(まじな)いの力が強まるよう蛇に見立て舌を割かれた。
死後その肉体は余すことなく「神」に捧げられた。
直接の死因は首を切られたことによる失血死。

「さら」の時の記憶は他人のようで、性質は人よりも獣に近い。



■八十八 巴(やとや ともえ)
八十八家の長女。

壺が壊れたことで溢れた瘴気に
当てられ一度死んだ。
壺を覗いたのは好奇心だけではなく
親への反抗心も含まれていた。
理不尽に抗う反発心と諦め、受け入れることに
長けている生来の気質との間で葛藤がある。



■白蛇
とある神社で神様として大事にされていた白蛇。
祝いも呪いも人が決める。



■てんしさまの納められていた蔵
八十八家の4つある蔵のうちの一つ。
巴以外の親族は滅多に出入りしない。
巴が整頓していたので物は少なく、
蔵の中では一番綺麗に保たれている。

奥の座敷牢は「座敷童」の供養のために遠い先祖が作ったもの。
縁起物がたくさん飾られていたが今は全て処分されている。



■八十八家の仏壇
形だけの仏壇。

■神社
さらが連れていかれた山奥の神社。
元はよくある山岳信仰の神社だったが
神主夫婦の子供が幼くして亡くなってからは
怪しげな呪(まじな)いに手を出すようになっていった。



▲ボツコマ

あとがき

この度は当作品をお手に取っていただき誠にありがとうございます。
成人向け漫画2作品目になります。
次に描きたい漫画が長くなりそうだったので、その前に
好きなモチーフで短いのでも…と描き始めたのですが
前作とあまり変わらないページ数になってしまいました。何故…
わかりやすさを心がけてはいるのですが難しいです。
蛇の作画が大変すぎますが蛇モチーフはまた描きたいです。

私の家は田舎で古い家なので割とムカデが出てきてこわいです。
ムカデに噛まれると普通に痛いので皆さんも毒のある虫には気を付けて
お過ごしください。(主にあたたかい時期)

■表紙デザイン：千代 様

笠と坂
カサザカ ヨヨ
X(Twitter)：@kasazakayoyo
✉ kasazakayoyo@gmail.com